

CONTENTS

学びをデザインする子どもたち
～つなぐ・つむぐ・つくる～

- 2013 研究発表会を終えて……………1
- 教育研究発表会を終えて（各教科部）……………2
- ICT活用授業研究会のお知らせ～個をつなぐ ICT 活用～……………3
- 学習紹介（社会科）：歴史から何を学ぶのか……………4
- 学習紹介（理科）：発芽に必要な養分はどこから来るの？！……………5
- 学習紹介（算数科）：課題の工夫で「対話的な関係」を……………6
- 学習紹介（算数科）：図形を多面的に捉える算数的活動……………7
- 学習紹介（国語科）：学び合いを支える言語活動の充実……………8

2013 教育研究発表会を終えて

去る11月2日（土）に開催した教育研究発表会には、全国各地より多数の先生方にお集まりいただき、ありがとうございました。

本年度は、「学びをデザインする子どもたち」～つなぐ・つむぐ・つくる～という研究テーマのもと、4月から研究実践を重ねてきました。校内研究授業ごとに助言の先生方にアドバイスをいただき、研究内容を見直してきました。

研究会当日は、9教科と複式の計授業23本を公開しました。

ご参会いただいた先生方には、本校の研究テーマにせまるために、教師のみとりと支援がどのような場面で、どのようになされていたのかを通して、特に下記の点に注目して授業を参観していただきました。



研究主任
梶本 久子

子どもたちがどのように学びをデザインしていたのか

授業後に行われた15の協議会では、参会者の方から積極的なご発言をいただき、私どもの提案した授業について十分協議を深めることができました。

また、午後からは体育館にて秋田喜代美先生の講演が行われ、本校のこれまでの歩みを踏まえた視点から、「学び合う学びをもとめて」というテーマでお話いただきました。私たちが研究していく上で、参考になることがたくさんありました。ほんの一部の紹介になりますが「授業における教師の仕事」「見える化への手立て」「教師の聴くときのポジション取りやその姿勢」など大切なことを教えていただきました。

また、具体的な授業場面を取り上げていただけたことで、参会者の方から「大変わかりやすく、参考になった。」「あの短時間で具体的な授業評価をして、それを非常にわかりやすくお話しただけことが有難かった。」などのご感想をいただきました。

本校は、昨年度より新たな研究テーマになり、2回目の教育研究発表会を開催いたしました。本会でいただいたご意見をもとに研究の成果をまとめ、2014年度は、最終年次として、この研究テーマで提案させていただきます。

ぜひ、来年度も皆様のご参会をぜひお待ちしております。



教育研究会を終えて（各教科）

Action 2

国語科	今年度国語科部では、「学び合いを支える言語活動」をテーマに研究を進めています。研究会では、「くじらぐも」「お手紙」「モチモチの木」の物語教材において、「多読」「音読劇」「心情曲線」を取り入れた実践を発表しました。今後も、子どもたちが三位一体の対話を通して、国語に対する関心を深め、興味をもって自発的・自主的に学びを進めていける学習活動を工夫していきたいと思ひます。協議会、アンケートでは貴重な御意見をたくさんいただき本当にありがとうございました。今後の研究にいかしていきたいと思ひます。
社会科	一人一人の学びの充実をめざして～ひとり学習を全体学習の場へ～をテーマに研究を進めてきました。3年生は「つなぐ・防災（持続可能な防災へ）～くらしを守る消防の仕事～」の授業では、備蓄倉庫に何を入れるべきかについて、みんなに自分の考えを伝えたいという強い思いをもって話し合うことができました。6年生「新しい日本へのあゆみ～1人の日本人として～」の授業では、広島原爆被害を受けた方の話を聞いた自分たちに何ができるのかについて話し合いました。協議会・アンケートで多くの貴重なご意見・ご助言をいただき誠にありがとうございました。今後の研究の参考にしていきたいと思ひます。
算数科	今年度、『子どもの思考が創る算数科学習～互いの考えを豊かに表現し合いながら～』をテーマに研究を進めてきました。1年生「おおきさくらべ」の授業では、任意単位を探りながら、比べ方をペアで考える中で「応答のある対話」に迫りました。2年生「分数」の授業では、色紙を使い、1/8の色々な折り方を見つけながら、もととなる大きさを等分する意味について考えました。4年生「面積」の授業では、正八角形内の色分けされた部分の面積を等積移動・等積変形しながら求積する活動、また、5年生「比べ方を考えよう」の授業では、人口密度の課題から「1あたり量」のよさに気づく活動を通して学びの深まりをめざしました。協議会・アンケートでは多くの貴重なご意見・ご助言をいただき、誠にありがとうございました。
理科	今年度のテーマは、『科学的な見方・考え方を育て、自然事象の本質をさぐる理科の学び～「ふれあう・わかる・伝え合う」3つの楽しさの充実へ～』です。4年生では、「ヒトの体のつくりと運動」の単元で骨や筋肉のつき方を考えながらモデルを製作しました。5年生では、「もののとけ方」の単元でものによって水にとける量が違うこと、そのわけをイメージ図で探りました。6年生では、「水よう液の性質」の単元でイメージ図を用いて、水よう液の性質を探りました。協議会では、多くの示唆のあるご意見をいただき、ありがとうございました。
生活科	幼小連携の必要性が強く求められている今、協議会では小学校低学年の先生方をはじめ、幼稚園の先生方からも、貴重なご意見をいただくことができました。また福島など、自然物を集めることができない地域では「あきであそぼう」という単元をどう組めばよいかという議論にもなりました。授業を通して、心地よく遊ぶための「ルール」づくりとそれを相手に伝えるための工夫について考えることができ、子どもの思いや願いがあふれるあきまつりをつくっていくためのエッセンスをいただきました。ありがとうございました。
音楽科	「比べる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～をテーマに、2年生「森のカニバル～いろいろな音にしたしもう～」、5年生「ハンガリー舞曲 第5番～曲想を味わおう～」を提案しました。2年生では、打楽器がたくさん登場する曲を聴いて、打楽器の演奏による強弱や問いと答えなどを味わいました。5年生では指揮者や楽器、強弱が異なる2種類の曲を聴き比べ、感じ方の違いを考えました。協議会は皆様から多くのご意見をいただくことができ、とても充実した時間となりました。誠にありがとうございました。
体育科	～運動の「おもしろさ」を発見し創造しよう～をテーマに研究に取り組みました。学年と領域は、3年生「体づくり運動」、6年生「キャッチバレーボール」でした。どちらも、活動を通じて感じたことや気づいたこと、工夫したことを体育館壁面に掲示し、学びの可視化、共有をねらいました。それにより、子どもたちは単元が進むにつれ、それぞれの「おもしろさ」を発見し創造していく体験を積むことができました。協議会での貴重なご意見を参考に、今後とも研究を進めていきます。ご参加ありがとうございました。
家庭科	生活力を育む家庭学習～自分をCHANGE！生活をCHANEG！できる子どもの姿をめざして～をテーマに、和食のよさを追究し、そのよさを生かした一食分の献立について考え合いました。栄養バランスはもちろんですが、旬のものを取り入れたり、ダシのうまみを生かしたり…。子どもが日頃何気なくいただいている食事を見つめなおすきっかけにもなりました。協議会では、貴重なご意見をたくさんいただき、ありがとうございました。
図工科	モネの「積みわら」シリーズより2点を鑑賞しました。影の様子や明るさ、色合いに着目して描いた時間を予想したり、積み上げられているように見えるモチーフは何かを考えたり、題名をつけたりしました。今回は2点の作品の比べ読みを「対話による鑑賞」の一つの方法として提案しました。友だちとの対話によって絵の見方を深める鑑賞の可能性は多様だと感じました。これからいろいろな鑑賞の方法を探していこうと思ひます。ありがとうございました。
複式	授業公開Ⅰでは、3・4年生理科、授業公開Ⅱでは、1・2年生算数5・6年生国語を提案しました。1年生から6年生までの段階を追った子どもたちの主体的に学び合う姿を見て頂きました。授業後の協議会では、低学年算数部会、中学年理科部会、高学年国語部会に分かれ、授業や複式で学ぶ子どもたちの育て方について発達段階に応じた複式指導や教科指導のあり方について感想や意見を交流しました。たくさんのご感想やご意見を、これからの活動に活かしていきたいと思ひます。

ご参会、誠にありがとうございました。来年度もよろしく願いお願い申し上げます。

和歌山大学教育学部附属小学校

ICT活用授業研究会

学びをデザインする子どもたち

～ 個をつなぐICT活用 ～

日時：平成26年1月31日(金) 13時45分～17時00分(受付13時00分～)

会場：和歌山大学教育学部附属小学校

内容：13時30分～ 受付
13時45分～ 14時30分 公開授業

2年 小杉学級(国語科), 3年 梶本学級(社会科)
3・4年複式 中西学級(理科), 6年 藤原学級(家庭科)

14時35分～ 15時15分 協議会

15時25分～ 17時00分 対談

問合せ：和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山県和歌山市吹上 1-4-1

Tel:073-422-6105 Fax:073-436-6470

E-mail:fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp

URL:<http://www.aes.wakayama-u.ac.jp> (詳細はこちらをご覧ください)



定員：100名

(申し込みはWebのみとなります。上記のURLからお申し込みください)

参加費：無料

※ 事前お申込みなく当日参加はできません。必ずWebで申し込みをしてください。

<講師>

野中 陽一 先生 教育人間科学部附属教育デザインセンター・教授

豊田 充崇 先生 和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター・准教授

歴史から何を学ぶのか

～充実した学びをめざして～

社会科部
6年C組担任
矢出 大介

歴史学習の疑問から

今年度の社会科部は「一人一人の学びの充実をめざして～ひとり学習を全体学習の場面へ～」をテーマに決めて研究を進めてきました。この研究テーマを深めるために、歴史の学習をどう進めていくべきなのか悩みました。なぜなら、子どもたちは「ひと・もの・こと」との出会いを大切にすることで、自分の課題を見つけ、学びを追究していくことが多いからです。歴史では、どうしても間接的な資料が多く、子どもが自分のこととしてひとり学習を深めていくことが難しいと考えます。そして、もう1つ自分の中で悩んだ点がありました。それは、小学校6年生の歴史の学習でしか学べないことがあるのだろうかということです。このような考えから、社会科部の研究テーマとこの2つの悩みを解決することを目標に今年度研究を進めることにしました。

「すごい」ではなく「おかしいのではないか」を大切にした学習

1つ目の歴史では間接的な資料が多いことで、ひとり学習を深めていくことが難しい点については、どうすれば子どもたちが資料などから疑問が生まれるのかを第一にすべきだと感じました。例えば、奈良の大仏の資料を見た時に、大半の子どもは「すごく大きい。」「立派だ。」という感想を持ちます。そして、この大仏のおかげで世の中が良くなっていったという考えが多い中で授業が進んでいくことが多いと考えます。しかし、必ず何人かの子どもは「なんでこんな大きい大仏を作ったのかな？作る意味があったのだろうか？」という感想を持ちます。実は、このような大仏などに対して批判的な感想を中心にして考えを深めていくことが大切なのではないかと感じました。なぜなら今の時代であれば、あのような大きな大仏を作ると考えるとおかしいと思う子がほとんどであると感じるからです。つまり、その子は資料を見て自分のこととして考えることができていると捉えられます。そして、今の時代ではおかしいと思えることをなぜその時代でしていたのかと考えることでひとり学習の意欲は高まると感じるのではないかと考えました。

資料の読み取りの出発点

子どものひとり学習

立派な大仏のおかげで世の中が良くなった（肯定的な考え）



大仏は作って良かったという限られた視点での学び合いになることが多い。



当時の人々の思いに寄り添いやすく、知識を得る学びになりやすい。

なぜあんなにも大きい大仏を作ったのだろうか。（批判的な考え）



今ではおかしいと思うことをその時代ではなぜしたのかという疑問が生まれる。



当時の人々の生活や思いに寄り添ってひとり学習を深めやすい。

歴史で学んだことを今の生活に活かしていく

今年度の研究を通じて、2つ目の小学校6年生の歴史の学習でしか学べないことがあるのだろうかについて2点あるように考えました。まずは、上記で記した今の時代にはおかしいことをなぜその時代ではしていたのだろうかという疑問をもってそこを解決していくことが1点。もう1点は、歴史を学んだことで、先人の思いや当時の人々の行動・願いに触れることで、どの時代においても日本をより良くしていきたいと考えていた人たちがいることを知る。そして、それを知ったことで、今の自分の生活と比べて考えることができるようになることです。例えば、近代史の学習においては、戦後直後の人々はどのような思いをもって日本を復興させていったのかを知る。そして、今自分の生活と比べて当時に人々の生活はどうだったのだろうか。そして、今の自分たちの生活は本当に当時の人々の願いに答えられているのだろうかなど、歴史で学んだことと今の生活を比べ考えることを大切にする。その上で、歴史を学んだからこそ自分たちの未来を考えていける個が育つようにしていくべきだと感じました。このような歴史の学習をするためには、近代史を学習することはとても重要だと考えています。それは、近代史は、戦後の苦労した時代から著しい復興を遂げるなど大きく時代が変化し、その変化を実際に人から聞くことができる学習だからです。

発芽に必要な養分はどこから来るの？！

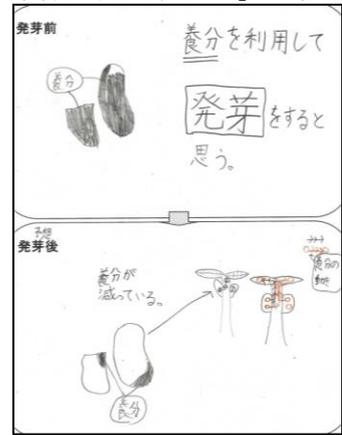
～植物の発芽と成長の単元より～

理科
5年C組担任
馬場 敦義



★発芽に必要な養分はどこから来るの？！

前時までに「種を眠りから覚まし、芽を出させるために、絶対に必要な条件は何ですか？」の答えとして、「水」「空気」「適当な温度」であることを明らかにしてきた後、「発芽に必要な栄養はどこにあるのか？」について考えさせた。ほとんどの子どもは、種子にあるのでは、じゃないかという考えでした。その中でも、梅本くんはより具体的に、種子の中でも子葉になる部分に栄養があると考えていました。そこで、ヨウ素でんぷん反応の実験を行い、確かめました。ヨウ素液が青紫色に変色し、でんぷんが含まれているという結果が出ると、より細かく追及し、「種子のどこに養分があるのだろう。」や「芽の近くに養分があるから発芽するのではないか。」というような気付きを書くことができている子どもたちもいました。すると、宮根くんが、「インゲンマメ以外の種でも同じように種に養分があるのかな？」とつぶやきました。山田くんは「もちろん、ある！」と反応し、秋元くんも「他の種にも養分がある。」と続けて発言しました。そこで、他の種子でも養分があるのかも確かめました。子どもたちとの話し合いで決めたものは、以下のものです。



[Aトウモロコシ, Bエダマメ, Cコメ, Dアズキ, Eビワ]

これらのものもヨウ素でんぷん反応が見られ、種子は種子の中にある養分を使って発芽するのだということ子どもたちは明らかにすることができました。

★どんな種子でもヨウ素でんぷん反応するのか！？

5年生「植物の発芽と成長」の単元では、教科書を含めて多くの場合インゲンマメを用いて観察、実験を行うことになっています。子どもたちにとってインゲンマメは比較的身近なものではありますが、授業を進めていく中で他の種子でも実験してみたいと思うことも考えられます。しかし、実はどの種子でもヨウ素液に反応するというわけではありません。種子に蓄えられている栄養分の割合によって、ヨウ素液での反応に差がみられます。例えば、ダイズなどのマメの仲間



間は、タンパク質を多く含むことが多く、ゴマやオリーブ、アブラナなどは脂肪分を多く含んでいます。炭水化物を多く含むものとなると、イネやムギ、トウモロコシなどのイネ科やインゲンマメということになるのです。



しかし、例外的なものがあります。エダマメです。大豆にはでんぷんがほとんど含まれない。そのため、ヨウ素液には反応しません。実はでんぷんを多く含むマメは、あん粒子が形成できるので、あんをつくることができます。つまり、あんができるマメはヨウ素液に反応するのです。あんができる代表的なマメは、インゲンマメ、アズキ、ササゲなどがあります。これらのマメは約50%もでんぷんを含んでいるものもあります。ダイズではあんはつくれませんが、東北地方の「ずんだ」と言われるようにエダマメならあんをつくることはできます。成長すると、でんぷんの割合が減るようです。他にもでんぷんを含むものはあります。エンドウやソラマメにもあります。子どもたちと見つけ出していくと面白いかもしれませんね。

子どもたちと見つけ出していくと面白いかもしれませんね。

算 数

1年B組担任
市川 哲哉



課題の工夫で「対話的な関係」を

近年、共同・協働学習やグループ学習、ペア学習が学校教育の中に導入されるようになり、話し合い活動を取り入れた授業がよくみられるようになりました。しかしながら、そこでみられる話し合い活動は、しばしば発言力の高い子どもたちが、大きな声で話したり、グループの中の良くできる子が、自分の意見（正解）を言って、分らない子がそれを一方的にきいて頷いていたりすることがあります。そうした話し合いは、一方向だけのベクトル、すなわち「モノローグ」でしかなく、「対話（ダイアログ）」にはなりえていません。つまり、「教える-教えられる」関係や「話す-聞く」関係が固定されているならば、それは「対話的な関係」とはいえないのであります。

「対話的な関係」を子どもたちが築いていくためには、まず自分と異なる存在として他者を認められる（差異を承認できる）力を子どもたちの中に育てることが必要となります。子どもたちは、自分とは異なる考え方や意見と出会う中で、他者の声に耳を貸し、自分の考えや意見を見つめ直す機会を得ます。そうした経験の積み重ねが、仲間を「他者」として認識する過程なのではないでしょうか。自分とは異なる考え方や意見と出会うことで、相手の声に耳を傾け、それに応答しようとする、そうした子どもたちの姿を授業の中に生みだしたいと考えます。実践の一部を紹介します。

1. 瑕疵のある（解決するために必要な情報が含まれていない）課題で「対等な関係」を

カードを全部使って、10になるたし算をつくりましょう。

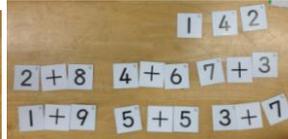
1 1 2 2 3 3 4 4 5 5 6 7 7 8 9

じつは全部のカードを使わず、たすと7になる分、余ってくるのだが…。

ペアで考えよう！

あれ？ぜんぶつかえないよ！

先生がいれすぎちゃったのは？



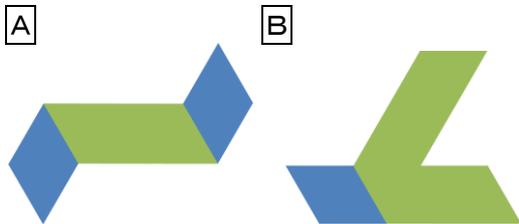
・5と2 ・3と4
・1と4と2 ・7

たくさん見つけたね。

あれ？たすとぜんぶ 7 だ！

2. 多様な答え・考え方があある課題で「対等な関係」を

どちらが広いでしょう。どんなにしてくらべる？



重ねると、わかるよ！



これだと、Aが青の部分1つ、Bが青の部分と緑の部分の2つはみ出ているのでBの方が広い。

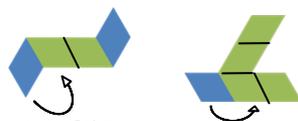


Aをひっくり返してこう重ねると、Aは小さい三角、Bは大きい四角にはみでるからBの方が広い。

やっぱり、ペアで考えよう！



折って、線をひくと、わかるよ！



こんなに折ると、Aは四角4こ、Bは四角5こ。だから、Bの方が広い。

いろいろな比べ方が、できるんだね。みんなで、たくさんの比べ方を、見つけられてすごいね。もっと難しいのに、挑戦しよう！

図形を多面的に捉える算数的活動 ～『面積』の実践を通して～

算数
4年B組担任
吉久 寛郎



◇ 『面積』の学習で大切にしたいこと

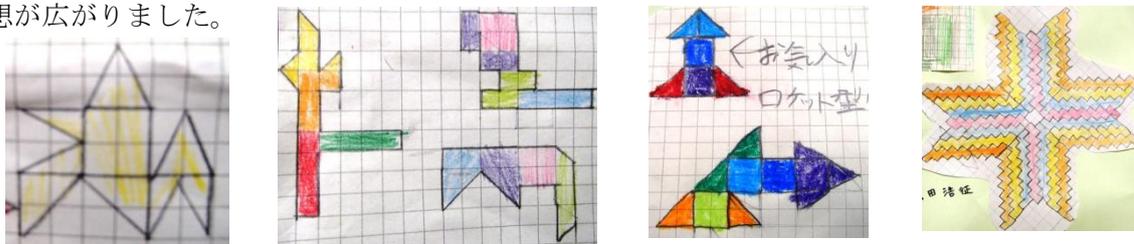
子どもたちにとって、広さ（面積）を本格的に学習するのは、4年生が初めてとなります。そのため、簡単に形式的な公式適用の学習に偏るのではなく、豊かな量感や図形を多面的に捉える素地を養うことを大切に指導してきました。今回は、図形を多面的に捉えるにしばり紹介したいと思います。

☆ 想像を上回る子どもたちの豊かな発想

□ 4 cm²の図形づくり

「4 cm²の図形をつくろう」と課題を示し、自由に図形づくりをしました。初めはどの子も1 cm²を基にした図形づくりをしていました。しばらくすると、1 cm²の正方形の対角線を切り取ってできた直角三角形や正方形の半分の長さで切り取った長方形がそれぞれ2つ分で1 cm²となると考え始める子どもがでてきました。さらにそれらを応用した1 cm²を4等分や8等分するなど子どもの豊かな発想に驚きを感じました。

初めは、数種類しかないと考えていた子どもたちも、多面的な図形の捉え方を知ることで様々な発想が広がりました。



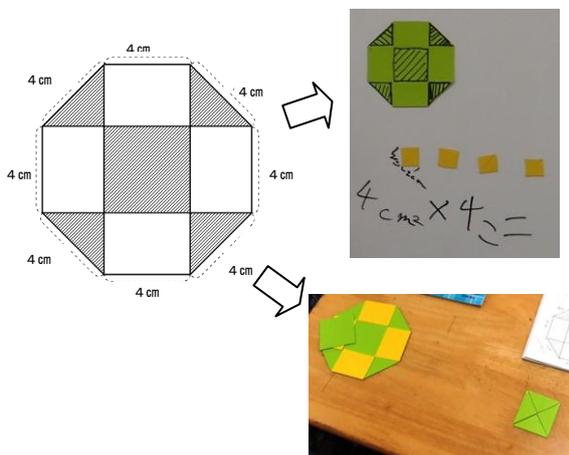
□ 広がった世界を具体的な場面で

新聞紙で作った1 m²を使い、学校にある様々な物の面積を調べる活動を行いました。一見1 m²では測れないだろうと考えられる物を、1 m²の半分の幅として考えて求めるグループも見られました。そのように考えることができた一つとして、単位正方形(1 cm²)を半分にしたたり、4分の1にしたたりするなど等積変形する活動を何度も行ってきたからでは、ないだろうかと思います。



□ 求積公式に適用されない図形を等積変形して長方形や正方形に

正八角形の濃い部分の面積を求める問題でしたが、等積変形をする活動を十分行ってきた子どもたちは、未習である三角形を含んだ図形を目にした子どもたちは、等積変形することで既習の図形に変えれば求められると考えることができました。面積の学習を通して、多面的に図形を捉える素地が少し養われたと感じています。



◇ 面積の指導を終えて

等積図形づくりを通して、多面的に図形を捉えることができるようになった子どもたちは、求積公式にあてはまらない図形に出会っても、既習の形に変形して考えようとすることができました。それらが、第5学年の三角形や平行四辺形、台形、ひし形の面積の学習にもつながればと思います。

学び合いを支える言語活動の充実 ～「ふたりはともだち」との出会いを通して～

国語科
2年C組 担任
小杉 栄樹



1、「学び合いを支える言語活動」を充実させるために

第2期教育振興基本計画（平成25年6月閣議決定）では、「自ら課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に考察する力などの育成を重視する」とし、「生涯にわたる学習の基礎となる力」と「答えのない問題に向き合う力」の育成を重要課題と位置づけています。それ故、小学校の学びにおいても、知識習得中心の学習から、豊かな読書や体験に基づいた深い思考力と表現力が要求される学びへと転換していく必要があります。本実践



では、子どもたちにとっての「学ぶことの意義」を考えた「学ぶ側の論理」を中心とした授業スタイルの創造をめざしています。「学び合いを支える言語活動」とは、その場その場で教師によって与えられた指示に従って学習を進めるのではなく、子どもたち自身が明確な意図をもって学習を進めていくことができる言語活動をさします。学習の基本となる科目である国語科における言語活動の充実が、他教科にも好影響を与えることを確信しています。

2、「ふたりはともだち」との出会いを通して

2年生の物語教材「お手紙」（アーノルド＝ローベル作）において、子どもたちの学びを充実させていくために、「多読」と「音読劇」を取り入れました。教科書教材の「お手紙」を含む五つの物語が掲載されている「ふたりはともだち」（文化出版局）を一人一冊もち、学習を進めていきました。第一次で、単元の流れをつかみ、第二次で五作品に共通する「がまくんとかえるくんのきりり」（二人の友だち関係がわかる心にぐっとくる場面）を読み取る中で、二人はどのような友だちなのかを考えていきます。一つの物語を読解と音読劇各一時間ずつ学習します。第三次では、シリーズの「ふたりはいっしょ」「ふたりはいつも」「ふたりはきょうも」の三冊を加えた中からグループで相談し、一番好きな物語を選び音読劇（2C友だちげき場）を行いました。



3、効果的な読解指導の工夫

10時間程度の単元構成で、「多読」を取り入れた言語活動を行う場合、たくさんの物語にふれることができるメリットがある反面、読み取りが浅くなるデメリットがあります。限られた時間の中で効果的な読解指導を行う工夫として、以下の四点を実践しました。

- ① 単元を通して学ぶ共通の課題を設定します。本実践では、「がまくんとかえるくんのきりり」を中心課題として子どもたちの話し合いを進めていきました。
- ② 単元に入る前に、子どもたちと教材とのやさしい出会いのために、教室に和歌山市民図書館からお借りしたおよそ50冊のアーノルド＝ローベルの作品を並べたコーナーを設けました。
- ③ ワークシートや付せん、ファイルを利用し、自分の考えを書き残す等、子どもたちの「学びの足跡」を残していきました。
- ④ 読書タイムや家庭学習での音読を効果的に活用しました。



4、終わりに ～「学びをデザインする子どもたち」～

本年度の本校の研究テーマである、子どもたちが「学びをデザインする」とは、学習者である子どもたちが、自発的自主的に学習に取り組むことであると考えます。本実践において、その原動力になったのが、「多読（ふたりはともだち）」と「音読劇（2C友だちげき場）」です。今後も、子どもたちが、三位一体の対話（佐藤学 1995）を通して、国語に対する関心を深め、興味をもって自発的自主的に学びを進めていける学習活動を工夫していきたいと思ひます。

From Editors

『らいぶ・創りえいた一』も12年目を迎えました。「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。本校ホームページにはカラー版を掲載しています。

ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

編集委員：居澤，小杉，上田，則藤，中西正，田村

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137

和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp